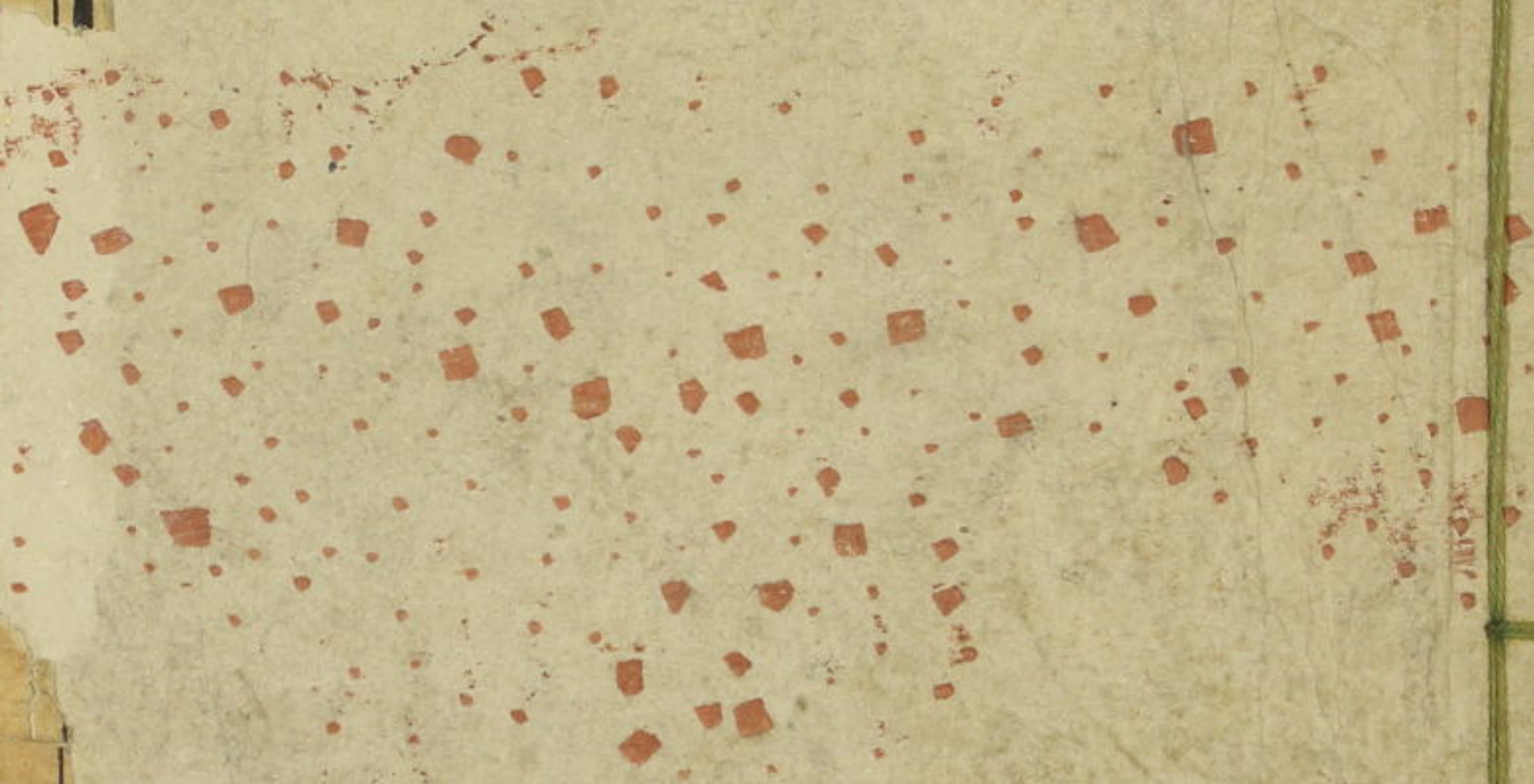




近世说美女年録

四編

四



~ 13

3567

19



門 13
號 3567
卷 19

新編 石童子訓卷之二下冊

第二十四回

九四郎五金を暗賢小齋に

先きうきくせむうトくんまき
賞罰路を異やて乙藝家不還る
登時住まの里長ハ峯張采六の上云と職善小詰別れて則答稟上さう御説でい
へる采六ハ幼稚ハ孟林寺ハ扈從ト兄九四郎ト同居其小松人トハ稟上さゆ
たハ父と職善うらゆ現采六ハ少年多れハ武藝の本事あれハ二兩個の夜盗を捕
捕けハ采六ハ休ハ実ハ身單也。這雨賊ハ生拘方終ト向ハ采六答てハ然ハ
小人ハ親峯張九四藏ハ兵法武藝を人ハ教て名ト知れハる者トハ小人ハ其大
刀筋ト聊学ハれハる。実ハ昨宵の掙ハ助劍の者ありハ僂身の武功ハ傲りハ
父ハ職善點頭て件ハ二賊を執索見ハ奉ハまきハ信ト見てハ馳鳥ハ吹五郎
若們ハ出処ハ麻且今様ハ自殺ハる。都て孟林寺の住持木玄ト峯張采六ハ告懸

神田 大學 図書館
34.6.3 雙
藏 書

新編 石童子訓 卷之二 下冊

十五

状不具不載る條々と相違あるは甚だ摩訶と向けて二賊ハ此ハ疑議甚言語齊
 一公等やう然ハ俺們ハ命運の盡る処這少年等ハ戦負て俱ハ痛癢と負入りも生
 捕れてハ何事と云應去告懇状ハ載れる首伏の事の趣此ハ相違ハ云とハハ
 職善ハ今様の書簡を多々合拵てハ今様の書簡ハ今様の書簡ハ自筆也然言ハ
 莅て若們ハ贈ハ是實なる歎と向を二賊ハ少ハ開ハ御尋生もの事ハ告懇状ハ
 明白なるハ職善又問やう然ハ這朱之众と十二屋九四郎若們ハ相識ハ
 素より鐵屑鍛冶郎の支黨ハ何と問ふと二賊ハ少ハ開ハ勿論ハ云ハ
 他等ハ何で支黨なる疑れハ這人々の不幸ハ云ハ職善嗟歎ハ云ハ
 今様ハ横死ハ則自殺也朱之众ハ所為ハ云ハ九四郎ハ罪案上ハ執至ハ
 市四摠等ハ赦して放ち返生完者ハ然けれども只這二賊ハ片言ハ事怒馬ハ云ハ
 明日又暖簾次等と召きて相質して違ハ實ハ疑を解ハ足云ハ朱六木訥

らハ這旨と明曰又當廳へ參るハ吹鳥太吹五三賊ハ朱之众ハ六市
 四摠等ハ這儘獄食返志ハ住吉の里長故老等ハ都て這意と云ハ
 宣示ハ是日の聽ハ果ハ却説其詰朝峯張茶六沙弥水訥等ハ住吉の里長故
 老等と俱ハ又浪速の陣館へ來り程ハ世袋屋暖簾次ハ當廳へ召されて
 今様ハ使せる兩個の小板早歌調子と喚做して今様ハ俱ハ十三歳を居て
 相俱ハ乳守の里長故老等ハ既ハ局の内ハ在り當下島嶋皆人頼紀美りハ兩
 個の強人佐枕駝鳥太狸毛吹五郎并ハ末朱之众晴賢十三屋九四郎の老婆ハ
 藝云乾兒六市四摠等ハ囚牢より牽出させ執索見せり守りて居り既中て三
 好木工頭職善ハ公葉の上ハ着坐多召人等ハ皆權廊の下ハ召せられて膝
 伏頭首せらる職善列ハ是を見て先暖簾次ハ向けるハ餘ハ這駝鳥太と
 吹五郎と認りて云ハ暖簾次頭を拾けて見ハ驚く色も云ハ否

小人の者毎と毫も認りひらぬとのふ又も職善の今様の書は同を令知せて喜ぶ
 嶋皆人の執接せて是を暖簾次の見せては又も暖簾次其書は同の今様が自
 筆さすや非と同れては暖簾次討りきす美戴はるも用ひては讀見ては愕然と敬馬を
 死て宜し是の仰の如く小人が認りらる今様の迹を紛ふくもひらぬと又も職善
 冷笑ては介らは是今様が横死し則ち自殺せし朱之の所為らる知せや其首小
 牽せては駝鳥太吹五郎有驗觀主吉命道人鐵屑鍛冶郎が支黨之餘他
 等と知せといふも曩小休が鐵屑鍛冶郎の娼妓今様と貸ては他擲遣す時隨
 即今様をて他が哄騙の媒鳥小せといふ駝鳥太吹五郎が招きては事既小發覺
 たり有恁れは休も鍛冶郎の支黨をと分明へ素も覺期の上をへといひては暖
 簾次駭怖れては戰慄々陳さす御誕まひも小人何ぞ那客の人をりては
 知りひえ乳守の里恒例也身品宜に熟人の客の所望小くて娼妓を貸す

遊山小徒者と同是あり今より四五輪前に比落北品倉の邊より今様許
 賜さす客ありて錢を使をと大さるといふ約莫一輪許と經て今様をては玩
 麻さる温泉小といふれが其間を身價の思ひの隨小受合ては貸遣しひに
 今稍思合まれ件の客の人の鐵屑鍛冶郎とをりては彼飲ひと知らる疎
 忽の至り今由後悔仕りぬといふも果ては職善の眼と瞳と聲許直て里の
 恒例也といふ筑麻の温泉の信濃と其路道はあらる今様とは貸遣す折
 僅小雨個の小三板を隨從せし其甚麼と最身許と叱り懲らる暖簾次
 俱一つら又那雨個の小三板早歌調子と召さす詞を和けて誦る也且表若們の
 今様と共侶の鍛冶郎俱せられて筑麻の温泉の時他が煉金の計較と必
 見ゆもあらる匿し告すの不をと屢問れて早歌調子と召さす合さす筑麻
 とらへ見比の奴毎を年九次十次とりては何事の記臆はる況怪と

思ひて聊のあらざるに一霎時名を更らして打出見と喚れり。餘は
 知らざりしと云ふ。其取捨を伴誑るる事、職善の亦是を詰らざり
 鳥太をふらち向ひて若們的の年来鍛冶郎が腹心を機密の都て知つて暖
 簾次は始より鍛冶郎を騙賊と知りて他相譚れて其利の爲に今様を貸
 他御へ遣せり。然と向ふに二賊はあむ言新くも今様を鍛冶郎と死を
 して誓ひ中をれ。竟に機密を叫び示して哄騙の因見を便ひの。暖簾次は
 かのりて知るに必に鍛冶郎の始より支黨の言れを嫌ひ。這故に年許は他
 行ひ騙術の洩るゝとあらざるに升と這浮世袋屋を罪せり。人を發見せり
 父を職善とちめて暖簾次は鍛冶郎が支黨にあむとも。他今様を便ひせり。其
 因見を便ひるを知りて數日の国房錢を利と爲る罪免るべし。兵毎這奴を
 郷に馳鳥太吹五郎と共侶の夙く獄舎に繋ぎを。烈に下知不伏兵を。心も果に

衝と寄て駭怖る。暖簾次の両も背へ換抗々々。緊しく索と被りけり。當下
 職善又父を馳鳥太吹五郎暖簾次を猶携回の義あり。開が儘獄舎に遣
 せり。又早歌調子も今様相似る。其罪を免らねとも。年尚十五未満ゆ
 且今様に従て鍛冶郎に俱せられ。其比に猶幼小ゆ。善悪邪正を知らざる。他
 格別の義を以里長を預置し。乳守の里長故老。毎皆這言をゆか。と渡されて
 阿とるり。谷口訥る乳守の衆人。怡感の早歌と調子を俱して外面へ出て兼書
 通を猛可物として呈され。身の暇を賜り。早歌調子を伴て。乳守へ還る程
 吹五郎鳥太暖簾次は執事郎を牽立られて。囚牢に投て退りけり。登時沙弥木
 訥と峯張菜六も。真嶋皆人乗り。喚登されて。檐廊に在り。他は九四郎の弟
 るれども。孟林寺の扈從。寺院待られ。又乙武藝。市四摠朱之。分一個々々。喚
 せられて。並て檐廊の下に在り。開が中。乙武藝。市四摠。乙名。既に郷縛の索と

鮮饒されて俱小頭と低て居り職善先采六から向ひて采張采六尚少年の小腕より二賊と捕捕り一事助劍の者ありと久も其掙の故より料を疑獄を解くと其功賞を乞へ信ら那身小所要なり木訥も這旨と信ら俱歸寺し木を這受を具の他へ又乙藝六市四徳の二賊吹五郎駝鳥大の招きし實をこれ九四郎の鐵屑が支黨ならぬ分明九四郎既罪責上六君們買其個の者も權且も留置くべらるるを放免を任吉る里長故老等も其侶を這意のゆ九四郎が安藝より還るとも俱して當廳へ参る及至只這旨と告知ね獨朱之众の同から他も亦幸罪鮮屍人を免れられぬ俺の身日間謀見より大和上市遣して他が那里在日約状と三百金の盤纏のゆき那里人縁て揚母朱朱之众の東國なる一諸侯の愛臣を主君小使を奉り大和路へ來て這留の程故めて上市る落葉が女塔小做るゆき那身放蕩せ頼を主君より預未

ゆき沙金三百兩と白布幾百反を賭博の爲の喪ひら贖同郎る破産戸安原甲某小謀られて奸淫の罪脱る路を四守の召捕られ落葉が幸く救ひゆき又那家小養の教訓數日詞を盡して御向他が喪ひる沙金と唐布を買せんと金二百兩を齎して京師遣してち其の正可不知れる但這舊悪のさらむ他浮室屋止宿の程做せる悪事のある故小荷三太怒て追出るとは這の粗野なほ知又今様が自殺の夜朱之众が旅刀を刺て死しゆける枕を並て臥るがう井と夢みだも知らざりし寔は鳥崎の白物乞と云恰と云有徳を斬る懸心見をの儘饒して還る何をて江湖上の牙人を懲まへる故小朱之众大和へ還ると饒さき又京浪速住吉左界小脚を留ると饒さき背と二百鞭せて東へ追放まは者之又量小朱之众九四郎預け金とて乙藝が當廳へ寄りる百九十五兩の朱之众が盤纏あは素是上市る落葉が沙金と唐布と

買せん。他の遞與せし要金を必故返す。其故不掩既使を上市へ遣
 きて件の落葉を召せたり。異日落葉が来る日小這を以他取らん。茶六の藝
 里長も皆這旨と云ふ。九四郎傳示し疑獄不忠誤水解を云ふ。正公
 一の飲びんと稱て身の暇を取られ。大家俱額衝て唯々と言美あらは。當下
 頼紀聲高き。兵毎々朱之介の谷中て追立を。劇多下知と傳ふ。執
 索の獄卒を養りぬと云々。朱之介不被る索の小を鏡多推伏て谷中を抗て。捷
 懲を數の百八煩惱の迷も斯や。墮獄の鬼を冥府の呵責目前に見るも懲懺は
 甚。藝者の痛痛く思へ。然るに在る。六市四樓父は。茶六木訥里長故
 老皆身の暇と賜ら。外面投て退け。介程朱之介の背を推ると。一百杖殆苦
 痛不堪され。聲を涯り。叫ぶの。遮莫俗云藤身。筋皮破る。小至ら。獄
 卒夙く捷果て。曳起して推居け。登時伏兵。而二名下知。小より。共侶。朱之介を

受會て退いて準備多。赶上て出んと。是日浪速の里稍盡處も。僕と追
 放を死為ん。是より先。六市四樓の茶六木訥里長。俱せられて。退り。門
 前。小中。大江杜四郎成勝。柿八を従へて。十三屋の隣人。及九四郎。乾見。櫛工。の
 みの地の。餘在る者と。甲乙都て。八九名。其頭の茶店。小待て居り。又蝨く。は藝者を
 見せ。て。走り。出。皆。共。侶。躬。て。茶。店。小。誘。突。て。歡。ひ。の。聲。洋。々。と。甲。乙。乙。勺。先
 茶と薦め。筆。食。と。會。て。開。き。き。程。小。木。訥。は。是。を。推。辭。て。衆。人。小。向。ひ。て。小
 中。師。父。の。待。不。樂。ぬ。小。僧。の。又。蝨。く。寺。小。退。り。て。這。飲。び。と。告。稟。さ。大。江。峯。張。の
 格。別。入。娘。々。と。宿。所。へ。送。届。け。て。明日。還。ると。い。は。れ。る。と。い。ふ。を。茶。六。小。ち。き。其。妻
 實。不。老。る。爲。べ。小。の。窮。既。解。れ。とも。俺。兄。逆。旅。の。留。守。る。れ。急。に。て。宿。所。へ。送。る。を
 要。す。小。の。妻。を。師。父。へ。稟。し。と。い。ふ。亦。杜。四。郎。も。木。訥。小。ち。向。ひ。て。咱。等。も。亦。時。具。小
 とも。て。明日。還。ら。せ。る。還。り。か。せ。い。這。妻。を。あ。る。ゆ。ゆ。と。と。備。心。木。訥。応。を。あ。り。却。衆。人。小



玉石屋子川巻三下

九二

文藝堂刊

六八

四四

五五



あららひとさ
四郎衆人茶
店小乙藝
等と迎ふ

玉石屋子川巻三下

文藝堂刊

六市

六八

五五

別を告げて柿八を招いて遠く。孟林寺へかゝる程に住吉の里長故老も。簞
 食と辨ひて還らまを。當下隣人ものひき。今日の赦免の由をあれが。妖怪の麻衣
 一襲と帯と日傘のまの宿野まで。素直とて。来り被更ぬと。袱包と渡せ。こ
 執の受載せて危うける大厄也。思ひかかると。大家の所の所泥會も。做作り衣の
 蝨く被更ても。顔さへも。ま。垢脂。漆て。久。櫛の齒と容れぬ。這頭顱を争何いせ
 んと。公と乾見も。諾らひて。六市が小母の宿野の這里より。十町も過たぬ。あや
 時と程さへ。那里へ。立ちのめ。ひき。身装の易う。と。り。六市四徳も。夢を俱
 點頭て。暗きも。如右を。思ひ。これ。卒立ぬ。との。を。を。自餘の乾見も。推林も。め。あ
 正との午の過る。比。皆物。發した。時候。さ。這。齋。と。喫て。を。左も。右も。ま。の。ひ。れ。と。ひ
 比。躬て。茶博士の茶と。請ひ。簞食を用ひ。里長故老。乙。藝。ハ。ハ。ハ。六市四徳を
 首也。四郎。米六。以下の。毎。さ。さ。く。簞食を引。も。て。柱。衣。る。果。子。盆。握。飯。込。ふ

世話を焼く。交る。胡麻の色見。を。鹿兒。斑。竹子。の。延て。節。立。生。魚。目。落
 其比。請の。着。漆。物。列。衣。着。添て。配り。做。中。酒。の。壺。取。會。抗て。甘。辛。の。堂。目。て。知
 る。一口。茄子。紫。の。灰。後。れ。る。糠。漬。の。半。分。入。る。庖。丁。の。研。離。れ。よ。男。同。士。女。二。人。を
 上。客。也。晝。飯。既。果。一。か。乾。見。櫛。工。共。侶。不。食。龍。小。盆。合。斂。て。裏。衣。中
 結。の。切。の。一。筋。千。筋。も。綿。の。麻。衣。會。出。ま。隣。人。等。の。帶。さ。ふ。乙。藝。糸。締。更。さ。さ。る
 卒。と。さ。る。不。曾。共。侶。不。身。を。起。を。時。誰。や。見。蹴。糞。茶。碗。の。忘。れ。水。古。ぬ。れ。せ。と。一。紙。の
 錢。を。お。し。つ。余。博。士。も。還。一。七。日。昼。流。る。汗。を。絞。る。も。あ。ま。日。陰。未。素。ね。の。程。不
 遠。く。も。あ。ら。ぬ。六。市。が。小。母。の。宿。野。不。來。不。け。れ。里。長。故。老。隣。人。乾。見。櫛。工。等。の。あ。ま
 辨。ひ。て。明。日。の。又。御。宿。野。へ。參。上。を。飲。ひ。と。直。さ。め。と。ひ。の。め。の。誠。ある。乙。藝。四。郎。米。六
 等。目。礼。ある。各。々。去。向。を。死。て。別。れ。け。り。復。説。六。市。が。小。母。ま。の。世。話。と。喚。做。さ。ふ。小
 經。紀。さ。け。れ。ぬ。日。も。又。早。見。も。生。活。の。為。不。出。て。の。ま。還。ら。ま。然。と。も。小。母。の。今。日。六。市

ら。故免せらるべしと。夢知りて其飲に不堪。飯を炊き湯を沸し。他が立を待程。果しく亭午過る時。候六市四摠共。侶の藝。杜四郎。朱六を先。立し。額の汗を拭き。背門口より。あふけられ。小母の遠く。出迎て。あふ六市の。恙る。や。皆さ。あふく。こを。あふ。先。遠方へ。と。華。坐席。あふ。請。大家。俱。心。皆。袂。扱。り。各。裳。の。塵。埃。を。拂。ひ。て。俱。小。母。屋。ふ。ち。登。る。ふ。四。郎。乙。藝。上。坐。て。朱。六。六。市。四。摠。の。程。く。左。右。の。ゆ。り。當。下。屋。主。の。老。婆。の。先。共。一。く。藝。の。向。ひ。て。不。慮。の。厄。難。赦。免。の。飲。祝。せ。び。藝。も。云。云。四。郎。朱。六。六。市。四。摠。詞。の。長。の。夏。の。日。の。炎。暑。數。の。東。道。態。の。先。晝。饌。を。薦。ん。と。い。そ。く。立。ま。さ。る。小。母。と。大家。急。の。推。禁。め。て。飯。の。方。僅。茶。店。を。思。ひ。の。隨。の。喫。べ。り。の。妙。ふ。浴。を。結。髪。を。を。願。り。け。れ。と。あ。開。の。見。る。庭。の。雨。戸。を。二。枚。三。枚。を。ち。込。込。り。大。盥。を。お。し。と。直。ま。假。浴。室。汲。合。る。熱。湯。二。桶。水。汲。入。る。大。柄。杓。二。三。四。を。入。れ。て。是。で。加。

減。吉。岡。深。の。浴。衣。と。出。を。管。待。態。小。卒。を。乙。藝。小。薦。れ。乙。藝。の。屢。飲。び。を。野。邊。の。石。竹。植。ら。れ。て。盛。過。る。盤。片。と。を。饒。一。の。と。簀。子。の。上。衣。脱。指。て。湯。入。れ。老。婆。の。猶。精。悍。く。禪。を。擡。て。拭。を。圖。め。殆。脂。を。擦。ま。は。送。の。口。誦。男。多。鄙。語。の。湯。の。鮮。美。の。水。あ。る。ら。ん。と。厭。笑。六。市。四。摠。の。身。を。起。し。俺。們。の。御。禮。を。湯。中。の。入。る。く。髪。を。剃。し。先。の。男。の。作。え。を。小。母。と。喚。り。錢。を。借。て。拭。引。提。て。出。て。程。の。杜。四。郎。と。朱。六。を。吹。入。る。風。と。待。自。任。柱。の。身。を。倚。て。憶。二。要。時。打。睡。り。恁。而。乙。藝。の。浴。果。て。櫛。筒。を。借。て。梳。る。有。數。系。小。長。江。雲。髮。の。乱。れ。苦。老。婆。の。今。を。稍。解。水。櫛。小。檢。下。し。又。拾。着。て。小。指。小。膝。髻。結。の。締。り。心。も。夏。の。日。の。流。る。臘。油。厭。く。照。を。鏡。の。水。髪。の。伏。た。時。を。得。し。結。髪。も。亦。果。お。け。り。當。下。主。の。老。婆。の。土。瓶。の。素。湯。の。茶。を。入。れ。て。盧。生。の。枕。を。ら。ね。も。碟。子。小。櫛。の。粟。餅。を。裝。り。四。郎。朱。六。を。喚。覺。し。て。藝。の。次第。小。煎。茶。と。薦。る。程。六。市。四。摠。の。浴。衣。結。髪。を。せ。て。

あり初て知らず其敬篤に大なるを。又快びも一入老先や里長以下の故老達
 中も五保中も礼儀云々を儘小出で一御をうち巡りて還りぬる午の時候余の故
 庵厨儲と奴家毎が漏れて俱に身を待程の主な疲勞堪えられん。躬て納戸
 退て假寐をてそむるをれと告るを己藝の合笑てその教がた涯り小づら然わん
 と知るりも多し。幾日もある垢脂漆て海松の像く小檜垂し髪を儘結もて
 還らぬをいふを多て六市小母指の宿所を立より憶を時を得る。悔多きをうち陪
 話れ。四郎来六父がらん六市四摺も快びて折う。大哥の歸御あり。水母の骨小の
 心地多て斯教へいふを。喚覺えん快と散動たる聲小九四郎の目も覺げん。咳
 けの間の重紙戸開て少て其頭を程と坐とてあやむ。皆恙るりや。腋子よ
 其首の端近る。這方へ找とぬ。と云ふ四郎の志と多し。己藝来六共保折小
 幸ある歸寧と大厄解し快びを云ふといふ多き。九四郎はあを否。酒家の御向

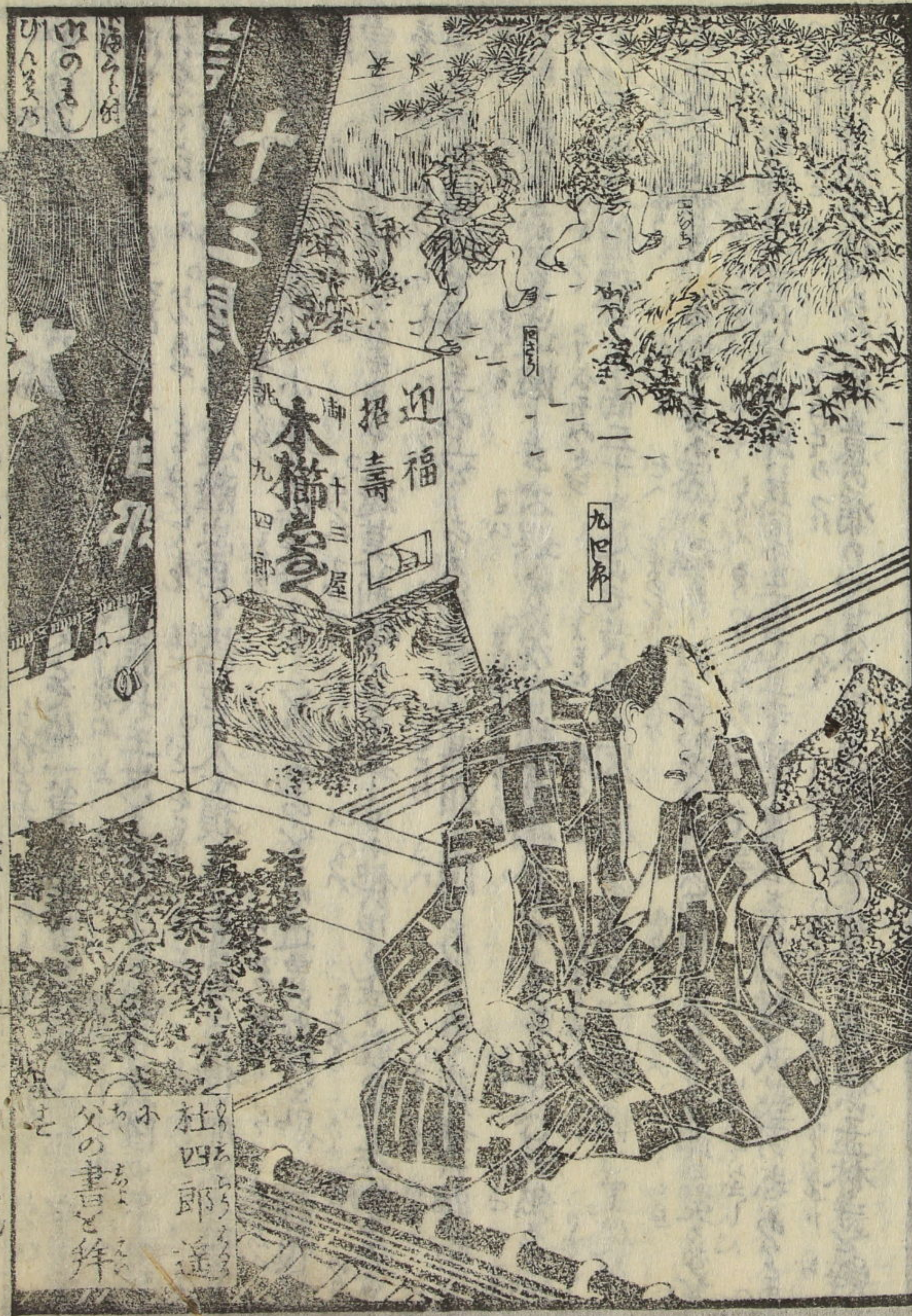
久くや。里長刀祿の故老達も。其直少知り。又只其変のさるる。並
 林寺の木訥法師が陣館より支果て還る路中。合會の。腋子と来六が武勇の
 梓に鐵屑とら。支黨る。一賊を斬く生物て竟に疑獄と解し。とい其顛
 末といはゆ。柿八老奴が話説を肇て知られ。大和る。落葉未と知り。信老實
 性人の形貌。おらぬ者。女中て見ま。艶治郎る。れば。俺救ふ他。留めて。薄
 情や事。惹き。俺思ひ足ら。行。争何。女。遮。其。六市四摺。命
 芽。か。束。見。切。の。快。却。俺。嚴。嶋。請。料。も。昨。今。ま。長。旅。小。倅。
 故。治。比。の。御。小。立。下。の。大。人。元。を。小。見。参。ま。れ。之。約。莫。是。第。の。秘。事。ハ。四。郎。腋。子。小。所
 要。あ。れ。も。開。ら。後。小。を。生。口。回。票。さ。ら。と。い。う。傍。と。見。か。ら。て。喃。妖。振。建。詭。さ。け。酒。館。と
 今。こ。出。の。と。多。ふ。雨。個。の。隣。妻。の。志。を。多。共。保。小。躬。て。庵。漏。退。て。酒。湯。と。り。

末學。坐著酒菜の二種と三脚有り。吸物膳と一個々々小措居ると六市四摠の執
 接て似ける酌と合船や船切の蕎麥の後段で先酒不盃と合揚る王人の二度を
 首で強飲の沙量も推並て送らさう瑣小鮮の蟾子の似ひをそれらでかろ末小ける
 俺妻子の恙るる。飲ひと又俺妹子も幸小冤屈の罪免れ其壽の酒祝ひ真と轉
 飲ひ不過中支をのい出らち少もあ時程も先送小醉を盡けり當下又九四郎の
 藝茶六市四摠を運田原の祟ふあ開の疑獄の所以か。他がみつろ作茶本
 せし。乙藝茶六市四摠を運田原の祟ふあ開の疑獄の所以か。他がみつろ作茶本
 あり然ると乙藝茶六市四摠を運田原の祟ふあ開の疑獄の所以か。他がみつろ作茶本
 れど。儘追放せられ。舊悪の咎も最不幸といふ。他百九十五金と没官
 られて。銀一文の盤纏を。他御へ追も放される。必路頭小立。俺怒小他と留め
 今其窮死を救ひ。始あて終。何れと使者とられ。末六と大。是れと他を

赶上。とのひ々懐る長財囊より圓金五兩を數へ。是を末六小遞與へ。其
 中俺意小那社仗の必浪速の御稍盡。伏兵僅小俱せられて追放。あわ
 ざらむ八彦友耶の這方まで赶上。せむ。逢ともわらん。後れも時既小後れ。及びか
 それまで。倘幸小遠く去ら。他於。其頭小在。汝と俺意と活。其金子を
 路費小取せ。六市四摠も。六市四摠も。然ら。咱も俱書。入
 捷徑こそあると。惴ると。末六推禁。已ね。和主。既小大。醉。俱。路
 障。六市四摠も。果。笑。其。心。安。我程
 も。夕風小吹醒されて。走。勢。生。平。増。ま。い。つ。も。裳。と。束。装。て。出。ま。さ。る。を
 九四郎。や。と。喚。返。し。若。們。が。醉。狂。身。俱。あ。も。末。六。倍。と。従。ふ。怨。ま。る。と。い。ふ
 乙藝。杜四郎。心。屬。開。程。末。六。件。の。金子。懐。禁。と。束。裝。外。套。と。腰。挟。と
 雨。刀。も。帯。做。て。率。走。一。走。不。と。外。小。外。脚。羊。草。履。穿。と。い。ふ。

心急迫を免夏の日暮春れぬ程中にてわく勢ひ奔馬小異るるに六市四槐の在兵
 脚を駐めもあを後れどと喘々を従ひける。あ時暑敷にて晴時做か雨隣の
 老波甚ふく運ぶ五盃を運ぶく庵へ退けて、おまおまむ向ひてのあ家毎暇を
 賜りて明日の炊火を致さる。汗流の湯をも沸して思ひる多き飯食饌の御款待の興り
 たりとあふ乙藝九四郎も共侶の芳ふて好御幫助とされそをも濡さる内祝の酒
 盃を済し、あまあままた明日の又主運と招き薄酒とまあらま。宜く稟一の心とあふ雨個性
 隣妻の志をまき身を起して左右の宿所へ還りける。修而四下外人存れ九四郎の恭り杜
 四郎のち向ひて和子今をまあ小可安藝へ赴く今茲初旅も元自、あまあまの諸の附
 たりての治比へまると大人あまあま見参せまもやま、あまあま講釈計不相別て單那里へ推参ま
 ける大人果して還参るる九四郎まを先一兩日憩せ、あまあま遂亦拜見と饒あ
 けり。折々大人の風濕の疾病あり。されも大病るるまの病林不在るる。小可と道く日

さるらち相譚せぬゆゑに異不別れまると十稔有餘過りよと云ふと其口まらふ。
 俺二親あまあまの身故り。女兄億禄短命あて支皆画餅なる元自、和子をまらふ。
 健小生育ゆる。米六を傳まらせて孟林寺へ寓居のあ。本隠和尚遷化の夏後任本
 玄道徳の老實送教不背まらふ。和子の才幹、文学武藝不志厚かるとま、あまあま詳ふ
 告稟まらぬ大人のあ。或飲ひ或いらち敷にあいて、あまあま故馬にも亦大々るる。這里も
 焦るまありとま。告まらぬまを養る。和子の大兄備中新司貞元君の不章短命あて
 三稔前まらぬま。あまのあまの口まののまらぬ。貞元主の家子る。幸松君も四五歳
 あて果敢く賜まらぬま。あまのあまの貞元主の母上、あまあまの續平、あまあまの脚敷にま。是も亦去歲
 の秋、あまあまの黄泉へ赴ぬあまのあま。和子の兩兄太郎君、あまあまの二郎君、あまあまの俱不志あ
 るところ、あまあまの既小長と成ぬ。あまのあまの小可御目を賜り。和子の上ま。叮嚀不問せぬあまのあまの
 ぬ。當日大人の宜ふ。相別より十餘年。這里も亦其方あ。鬼籍入る者ま。



木箱

十三

迎福招壽
木箱
九四郎

九四郎

六八

お社四郎達
父の書と并



九四郎

あつり



かりける老少不定の世の夢今戦國の時とて俺一筆の雁書と惜とて四郎が安本を
 向せらるあわら其故の西七國の守大内義興と王世とまうりよる嫡子義隆少年を
 倭人稍時とて賢者と遠離忠臣と謂とて人を損する間是あり俺の那家の被官
 るれも附庸小似分小身されに従ひさるべきとて近曾の出仕と歎の謹慎を
 宗とて遠く使れとせざる。遠莫荊婦の世在一日他はしむ喜就ゆも其基細も告
 示して四郎億禄を母と子の上下あはれさるる其頭小障りあるとる。荊婦の臨終も
 四郎小對面をが死を遺憾とて不娛らば況音就基細のさうくとも思へけれ然る俺
 荊婦のゆゑ億禄の年尚三十未足らば黄泉の客小作りあり今初て知る慨し。俺年
 年の衰へて病苦かの如く身小添の魂氣必長かりて故の再會と四郎小契るるを
 え。このまがとて。四郎の良胤生出て且寺院小寓居をぬれ縦武執事の志ありとも
 つい。竟小細流小化せられて佛意の凖のや見今も好時候に栄六と共侶小孟林寺と辨

去去のそ武者修むる諸國を。豪傑小交りて資助と承るるも。夫百足は虫
 死して仆れる者の杖助をばよとて其も他尊大身と必人小疎るべ。然らば汝弟兄は
 四郎が外叔父も栄六と四郎小増さる僅小二歳の兄を。あまのく主僕の尊卑を
 以て。俱小胞兄弟の思ひと做して是は資助の創小其竟小武功小做らるん其成功を
 家裏中しての地小到て兄音就と輔佐して地を開くるあは。大孝順とて。這を
 四郎小徳とて。宣ふ聲も惱りけ。病苦堪見えあへ。耐難小唯々とる。小言兼
 ち。退治て却而三日と経て立去らる。彼せし大人小別を惜とて一日とと留めぬ。兼
 太郎君二郎君も俱小孝順にけれ。朝夕枕方脚方おぼ。慰心の詞敵小小可とて。日
 毎小召させて放ちぬ。もあはれ。憶小を。留又り。て。三伏の夏。圃を。俺家の
 和子の。夏心小拭らる。あはれ。屢身の暇とて。京を。大人小竟小禁め難とて。着病小
 修。其房小吩咐て。鏡櫃小藏借れ。金三裏合。出さる。て。并小小可小。遊。與。る。且

宣のま申まう其その一ひと裏うらの四よ郎らう六む六む武ぶ者しや修しゆ仍のうの路ろ費ひ取とり又また一ひと裏うらは這こ年ねん來き津つ吏し
 婦むすめと孟まう林りん寺じの現げん住じゆの四よ郎らうと教きやう育いくの報ほうひと送そう路ろの重おも荷かをかげれどと七しちかかりて配はい分ぶん
 せんとお休やす小こ可か畏をとと兼かねて這こ一ひと裏うらの左ひだりの右みぎのこ可か多たとと賜たまふ當あたりの推い辭じ直ちやく示し共ども
 頭かぶとと掉おてと又また要まるるに口くち誼ぎ病びやう中ちゆう自じ由ゆうををままんん日にち就しゆ不ふ寫しやせせる短たん文ぶんの二に書しよあり其そのを
 證あき据こふ四よ郎らう不な見みせせると言い叮てい寧ねいふ不な一ひと變へんの太たい郎らう君きみの件けんの御ご書しよと小こ可か不ふ渡た一ひと賜たまりて異
 日ひと契せきりぬぬも身みの感かん涙なみだの外ほかわわかか却かへああるるははああららざざれれ身みの暇ひまと賜たまりて退たいれれ件けんの
 金かね子こと粟あは菰こふふと恙やももる水みづ路ぢの旅たび宿しゆく日にち數かず歴れきてかかり多おほてゆゆけけ宿しゆく所しよの山やま邊へ
 乙おつ廿ふた藝ぎ六む市し四よ摠とつ名なの疑ぎ獄ごくの和わ子こと六む六む武ぶ功こうの鮮せん方かた教きやうびと大おほ人ひとの生なまる由よし
 るる先まづ那の御ご書しよと懐なつより一通ひととほと令しんふふと杜つとむ四よ郎らうの徳とく與よを折おりり外ほか面めん人ひとの
 脚あし响ひびくく這こ方かたと投なててああるる者ものありり丹に又また下したの回まわりり鮮せん分ぶんると聽きねねかかし

新局玉石童子訓卷之二下冊



